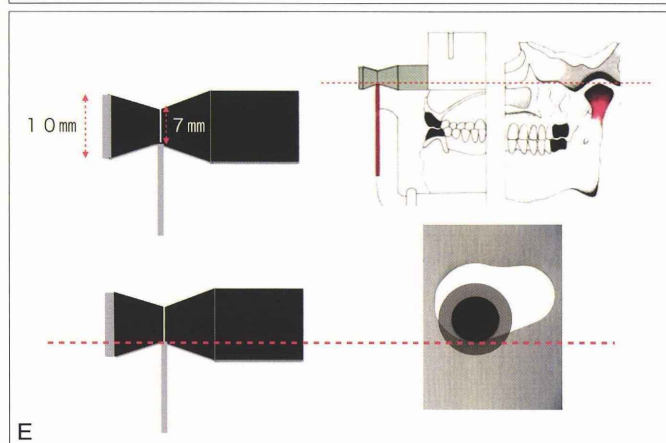
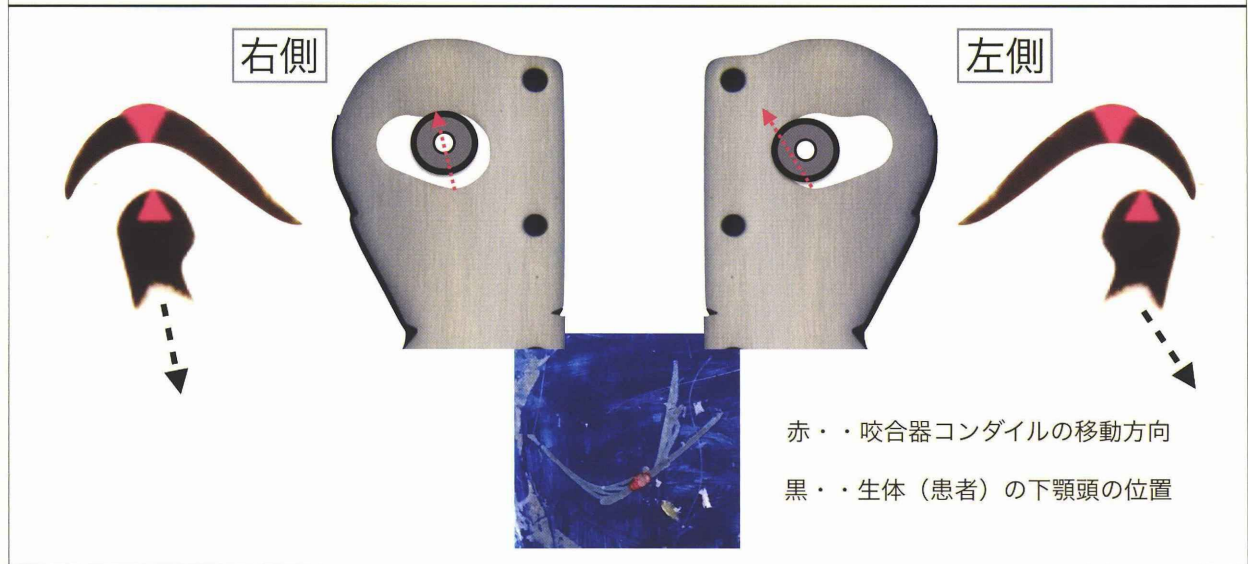
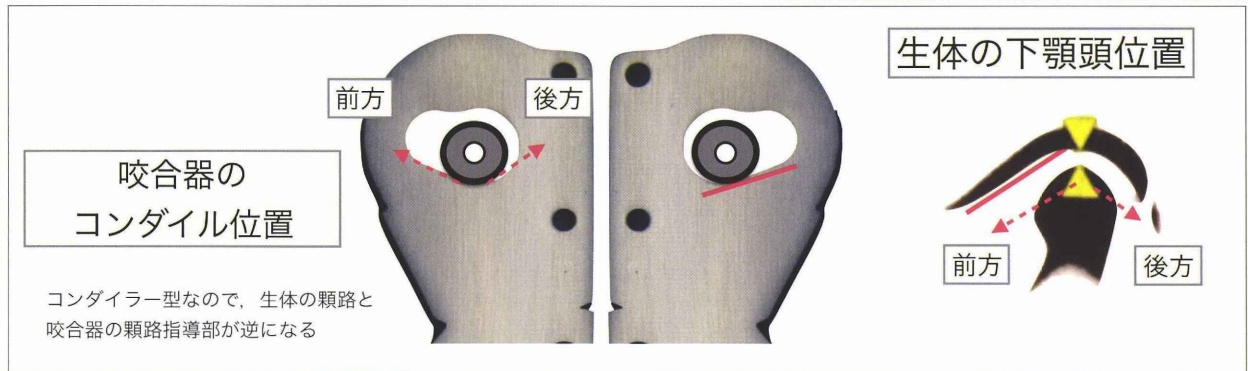
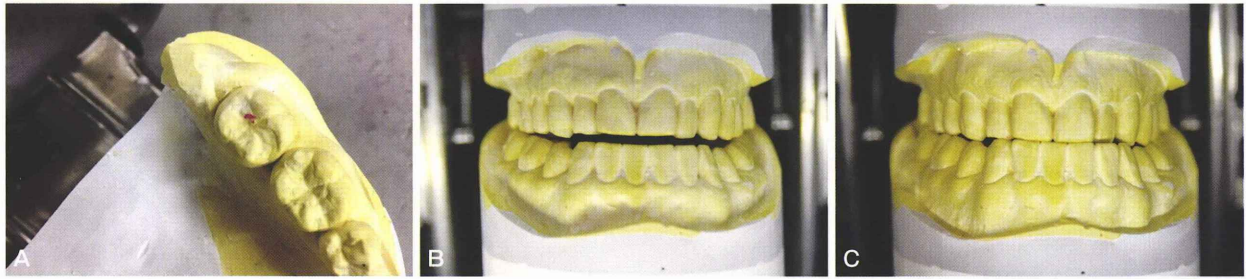


訂正

本連載第2回（第46巻 第2号）の図32につきまして、誤りがありましたので下記A～Eの通り補足・訂正いたします。



A, B 模型上の「T」遠心咬頭内斜面に接触があり、咬合器上の中心咬合位では開咬している
 C ロック部を外し、顆頭部をフリーにして模型を咬ませた状態
 D Cの状態のコンダイル（顆頭）部の状態。赤線のように、右側、左側ともコンダイルは上前方に移動している。これを生体の動き（黒線）に置き換えれば、右側下顎頭が早期接触位置からやや前下方に、左側は後下方に移動したことになる
 E コンディレーター咬合器のコンダイル部は、立体的なサイドシフトを与えるために鼓状の形態になっている。よって咬合器上で下顎の動きを観る際は、咬合器顆路指導部（生体では下顎窩）とコンダイル（生体では下顎頭）の接点である、図の赤点線部からのコンダイルの動きを観ることが重要となる（咬合器上では、生体と違い関節円板がないということも考慮する）